

ロマン・ロランの伝記作品における 「偉人」または「英雄」について

<ロマン・ロランの伝記作品研究>序説

—その固有の「神」への信仰—

三木原 浩

《燃えたつ、凝縮されたいいくつかの短い伝記、
—そこには、偉大な魂たちの英雄精神
(héroïsme) と信仰 (foi) とが集中されて
いるだろう...》

(ロマン・ロラン：『回想記』、p. 310.)

《私〔ロラン〕が教えたいと思うのは、信仰
(foi) です、英雄への信仰 (la foi dans le
héros), つまり「神性」への信仰なので
す。》

(ロマン・ロラン：『カイエ＝ロマン・ロ
ラン・1』、マルヴィーダへの手紙から、
p. 123.)

一つの生涯のある時期に、あまり重要な意味をもたせることは避けた方がよいのかもしれない。がしかし、人生には決定的としか呼べないようないくつかの時期がある。それはその時期を境として、以前の古い自己が新しい自己のなかに生まれ変わり、以後の人生をもっとも本質的な部分で方向づけてしまうが故に決定的なのである。そのような意味で、ロランが彼自身《私の精神の真の誕生》と名づけている1901～1902年を、私たちは、ロランにおける決定的な時期の一つとみなすことができよう。後年、彼は『回想記』のなかで、次のように追想している。

《『ジャン・クリストフ』とともに、私の作品のうちでもっとも持続的ないつ
さいが生まれでた私の精神の真の誕生は、1901～1902年から始まったとい

うふうには私は後になって信ずるにいたったが、そのころ、私の社会生活の中には、ひとつの破綻が生じ、私の社会生活は、貧しさと孤立の中で、全面的にたてなおされねばならなかった。》(1)

いつの場合にも、生活の《貧しさ》は暗く痛ましい。彼の作品にたいする世間のたびかさなる無理解は、ロランにとって、経済的な苦しみとなって具体化し、さらに芸術的立場の《孤立》となって表面化する。しかしここに述べられた《孤立》のいま一つの深い意味 — 妻クロチルドとの離婚(2) — を知るとき、生活の痛しさは、真実生きることの深い悲しみに合体する。事実その前年、1900年2月、彼の戯曲『三人の恋する女たち』の国立劇場における上演が拒否されたときにも、彼はその失意を次のように表白している。

《また敗北だ！．．．十年このかた、私は一步も前進していない。私は自分がすべての人たちから孤立しており、家庭にあっても、友人たちのなかにあっても、孤立無援であるを感じる。》(3)

芸術上の失意と家庭における精神の危機が、同時にロランをきびしい試練のもとにおく。彼は、妻からも、身近な友からも、また彼の芸術を受け入れぬ世の人からも、精神的に遠く離れてしまっている自分を感じる。それ故、彼の《孤立》とは、実質的な社会生活におけるよりも、むしろ寂寞たる彼の内面世界にあって、一人たたく魂の孤独を意味しているといえよう。

しかし寄辺なき、抑圧された魂が、自らその悲痛をつつみこみ、打ち勝つことを意欲するとき、魂は、隠されていた自らの力を予感する。それは魂に内在する力、根源の生命力である。その生命力は、魂の内部にあって湧き出るや、しだいに満ちゆき、やがて魂の全体を支配する。その時、もはや魂は立ちなおっている。

回復したロランの魂は、豊かな創造的生命に満ち、自らの意志と力で、新たな道を切り開く。その時、逆に今度は、その魂のなかに無言のよろこびが侵入する。

《どの劇場も、私〔ロラン〕には開かれていないのか？ — 私は、私の精神の劇場をもっている。悲痛であるいかなる理由を私がかもっていようと、私が平和で、よろこびにみちていないようにすることは、彼ら〔世間の人びと〕にはできないだろう。》(4)

それは、《精神の眞の誕生》に先だつ、《内面の革命》(5)の成就である。同1900年4月の日記に、ロランは、感激をもって次のように書きつけている。

《．．．私は私の前方に、ひとすじの、まっすぐな美しい道を見る。そして私は、私が全うせねばならないその長い道のりに、よろこびを感じるのだ。私は、ちっとも急いではない。．．．今や私は、〔目的地に〕到達する自信をもっている。》(6)

ここに言う《美しい道》こそが、以後40数年にわたって、作家としてロランが歩みつづけた創造の道である(7)。その長くてきびしい道のりのあちこちに、創造的生命の芽は萌えいで、花開き、やがて豊かな作品として結実するであろう。出発にあたって、急ぐ必要はすこしもない。収穫はずっと先でなされるであろうから。

ロランは、この未来への確信に満ちた予感に導かれながら、この引用につづく日記の部分で、壮大な創作計画を、熱誠をこめて書き記す。フランス革命劇連作や、ジャン・クリストフや、音楽史などの計画が、つぎつぎにたてられる。そしてそれらの諸計画にたちまじって、昔日のブルータルコスの『英雄列伝』になぞらえた、現代の新しい英雄列伝たる、《偉人の生涯(伝記)》(Les Vies des hommes illustres)の執筆計画に、私たちの目はひきつけられる。ロランも言うように、その生き生きとした、新鮮な息吹きに鼓舞された《「偉人の生涯(伝記)」の筆頭に、すでにベートーヴェンとミケランジェロが予告されていた》(8)。この予告の実現に、懐胎の歲月、二年余が流れる。そしてついに、1902年10月3日付でマルヴィエーダ・フォン・マイゼンブークにあてた彼の手紙のなかに、私たちは、待望の言葉を、新生ロランの決定的な第一声を聞くことができる。

《私は、ペギーの『カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ』に、．．．ブルータルコスふうの一連の「偉人の生涯(伝記)」》(Vies des hommes illustres)を発表しはじめるつもりです。．．．彼らの精神性に重点をおいた、現代の英雄の生涯(Les vies des héros)です。私は、ベートーヴェンからはじめます。》(9)

かくしてロランは、一連の《英雄の生涯(伝記)》に着手するが、それには、彼の歴史学者としての実証主義的な研究方法と、生来の博大な《共感力》、あるいは

詩的直観力とが、大いに寄与していることを指摘しておかねばならない。

なるほど、ロランは厳格な歴史学者であった(10)。彼の綿密な資料研究と、周到な文献批判は、主人公たる人物 — 《英雄》が、実際に生きた過去の歴史的事実を、外側から、可能なかぎり明らかにする。広くは、当時の政治、経済、文化、思潮、関係諸国のさまざまな動静など、および、それらの事実と《英雄》との関連が、また身近には、《英雄》と彼をとりまく主要人物たちの、外面的な生活や、環境、あるいは資料として残された言動などが、客観的な価値をあたえられ、相対的に意味づけられる。さらにこれらの検証の過程でつかわれる現実主義的な歴史認識、人間認識のするどい眼は、《英雄》の無意味な理想化、偶像化をふせぐ上で重要な役割をもっている。

事実、ロランは、『ミケランジェロの生涯』の序のなかで、次のように言っている。

《私〔ロラン〕は、近寄りがたい英雄の像を建てはしない。私は、人生の悲惨さと魂の弱さから眼をそらせるような卑怯な理想主義を憎む。》(11)

またロランは、『ベートーヴェンの生涯』の序のなかでも、次のように言っている。

《... さもしい大衆のための空虚な偶像。時は、そんな偶像をひとまとめにして破壊してしまう。》(12)

たしかに実証主義的研究が明らかにする《英雄》像は、時の流れや時代の主観的な好みとはかわりなく、学問的な客観性をもつことができよう。だがそれだけでは、たんに過ぎ去った歴史の一時期に固定された《英雄》の外的真実を提示しているにすぎない。

ロランは、そのような静止的な、外面的な《英雄》の把握に満足しない。ロランがもとめる《英雄》は、正確な事実の背後にあって、息づき、心臓の鼓動をうつ一人の人間なのである。それ故ロランの関心は、《英雄》の内面の奥深く、言い換えるなら、《英雄》の精神性、道徳性といった内的真実に向けられる。そしてその洞察に、ロランの詩的直観力と、深い《共感》能力とが参与する。

ロランは、《英雄》の外的真実を証明する無数の資料を前に、《英雄》とただ二人、孤独な内面世界に没入する。そしてそこで、真実と愛にみちた無言の対話をま

じえる(13)。魂と魂の対話である。やがて二つの魂が交感する。すべての感情が、二つの魂のあいだを交流する。すべての感情を、二つの魂は共有する。《英雄》とともに、ロランは生き、愛し、思考する。《英雄》とともに、よろこび、悲しみ、怒る。これこそが、語の本来の意味における《共感》(sympathie)というものの実相であろう(14)。ロランは、彼の『内面の旅路』のなかで、次のように言っている。

《．．．愛すること．．．共に楽しみ、そして共に苦しむこと．．． — 「共感」の法則．．．》(15)

このように、ひとたび《英雄》と内面的に深く同化したロランが、ふたたび自己にたちかえった後も、その鋭い詩的直観の眼にうつるのは、矛盾しあうもろもろの思想や情念に悩み苦しみながらも、つねに戦い前進する《英雄精神》にみちた一人の人間のあるがままの姿であり、自らの生への確信と絶望のあいだをはげしく揺れうごきながらも、人間への愛を失わない一人の《英雄》のなまなましい内面の真実、精神の崇高なドラマである。

ロランが、彼の一連の《英雄の生涯(伝記)》で描こうとするのは、このような、時代を超えて現代のなかによみがえる、一人の人間の内的真実なのである。過去の魂の、現在への蘇生である。その時、《英雄》は、歴史の一時期の客観的な証言者たるにとどまらず、永遠の時間のなかにつねに復活してくる、生きている魂たりうるのである。ロランが、フランス革命劇の『ロベスピエール』のあとがきのなかで述べている創作態度 — つまり、《諸事実の物質的な真実性よりも、諸性格の精神的真実》を重んじる(16) — は、彼の「伝記」における主人公たちを再創造する場合にも、そのままあてはまるのである。

そして1903年、ついに小さな『ベートーヴェンの生涯』があらわれる。それは、ロランにとって思いがけない《文学的幸運の始まり》であっただけでなく、列をなして買いもとめた若い読者たちにとっても、予期せざる《精神の突然の啓示》であった。『カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ』の主宰者シャルル・ペギーは、1910年に書いた『我らの青春時代』のなかで、次のように追想している。

《．．．ロマン・ロランの『ベートーヴェン(の生涯)』があらわれたばかりであった。あの『カイエ』がどんなに突然の啓示であったか、それが世の端

から端までどんな感動をひきおこしたか、それがあたかも波のように、底流のように、いわばまたたく間に、どれほど突然に広がっていったか、それがすべての人びとの眼から見て、ひとつの啓示、ひとつの突然の相互理解、ひとつの共通の相互理解のうちにあって、どれほど突然にして瞬時のうちに、ロマン・ロランと『カイエ』の文学的幸運の始まりとなったかということだけでなく、そのようなことをはるかに超えた、ひとつの精神の突然の啓示であり、ペールをはがれ、あらわにされたひとつの予兆であり、精神の大きな幸運の啓示であり爆発であり突然の伝達であったかということを、私たちの購読者たちはいまだに覚えているのである。》(17)

普仏戦争敗北後の暗く重い歴史情況。《偉大さのない物質主義》と、《さもない利己主義》が、人びとの思想と行動を支配する(18)。若い魂たちは、生きる《支え》を見失い、ただひそかに《救いを、友を呼びもとめ》(19)ていたのである。

そして今や、ひとつの《救い》は、ひとりの《友》は現われた。一冊の本が放射する《精神》の力強く輝かしい《啓示》の光が、彼らの魂の奥底までをも射抜いたのである。

この啓示の光こそ、ロランが彼のささやかな『ベートーヴェンの生涯』のなかで、自らをもその照らし返しのもとに救うべく、注入し、鼓吹した《英雄精神》(héroïsme)の発現にほかならない。ロランは、『ミケランジェロの生涯』のなかで、次のように言っている。

《この世には、ただ一つの英雄精神しかない。それはこの世をあるがままに見て、——そしてそれを愛することである。》(20)

ここに、《英雄精神》とは、現実の悲惨から目をそらす空疎な理想主義をさすのでもなければ、自己の弱さをつつみかくす大げさな虚言をさすのでもない。ロランの言う《英雄精神》とは、一人の人間が、自己と世界を直視しつつ、自らの生をあるがままに引き受け、宿命として担い、いつくしみをもって運びつづけること、そして同時に、その彼が、この世にあって、真に《偉大》なるものに対して抱く魂の純粋な《熱望》を實現に向けて不断に行為することをさしている。結果、そこには、現世への真摯な愛に満ちた肯定と、深い現実主義につらぬかれた確かな理想主義とが共存する。1936年6月29日付で、ロナルド・A・ウィルソンにあてた手紙のな

かで、ロランは次のように言っている。

《．．．その魂が、まさに何かに値する場合、その魂は、それを自分自身の内奥に、つまり自分自身のさまざまな熱望に負っているのです。そしてこの熱望は、多くの場合、その若者の幼年時代と青年時代とをとりかこみ、そして彼を抑圧する時代情況に対する反動によって生まれいで、成長するのです。私も、そうでした。私は、私を窒息させる世界に抗するのに、私の気力をふりしぼり、私の内にも、私の周囲にも、英雄精神を鼓吹せねばなりません。そして至極当然のことながら、私は、期待しうるいたるところに、私の支えを探しもとめました。生きている者たち（トルストイ、イブセン）の内に、死んだ者たち（ベートーヴェン、ミケランジェロ、ワグナーの音楽）の内に。》（21）

この手紙の一節からもわかるように、ロランは、彼の《英雄精神》を鼓舞する《支え》を、誰よりもまず、彼が畏敬し、敬愛する《偉大な芸術家》たちの内にもとめている。なぜなら、ロランもまた、彼らと同じく、芸術家に属しているからであり、かつ《偉大な芸術家》こそ、自らが真に《偉大》であるために、《英雄精神》をたえず鼓吹することを宿命づけられた、少数の人間に属しているからでもある。

それ故、芸術家は、おのが《英雄精神》の十全の開花を見るとき、はじめてその《創造的天才》を発揚し、自らの深い《内心のよろこび》を感じることができる。事実、インドのディリップ・K・ロイにあてた、1928年8月22日付の手紙のなかで、ロランは次のように述べている。

《もしも彼〔真に偉大な芸術家〕が、おのが内心のよろこび、おのが創造的天才をもっていないなら、彼は生きていくことができないでしょう。彼は窒息して、死んでしまうでしょう。彼は、呼吸するために必要な空気を、自分自身でつくりださねばなりません。 — そこで、英雄精神が必要なのです．．． 》（22）

このようにして、ひとたびロランの内部に燃えあがった《英雄精神》の炎は、彼の生涯の終りまで消えることはなかった。1936年に、彼自身、次のように言明している。

《．．．私は英雄の生涯（伝記）を断念したことは、かつて一度もありませんでした。》（23）

『ペートーヴェンの生涯』を皮切りに、最晩年の作『ペギー』（1945年出版）にいたるまでの後半生全般に渡って、つぎつぎと《英雄の生涯（伝記）》が発表され、出版されて行く（24）。—『ミケランジェロの生涯』（1906年）、『トルストイの生涯』（1911年）、『ガンジー』（1923年）、『ラーマクリシュナの生涯』（1929年）、『ヴィヴェカナンダの生涯』（1930年）等々．．．（25）。

しかしジャック・ロビシエも言っているように、《いわゆる「偉人の生涯（伝記）」（Vies des hommes illustres）を構成するもの》（26）と私たちが言うとき、それは、ロランの伝記執筆初期にあたる約10年間にあらわれた次の三つの作品をさすことが普通である。その三つの作品とは、今後、私たちが試みる一連の＜ロマン・ロランの伝記作品研究＞のはじめにとりあげる、『ペートーヴェンの生涯』、『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』のことである。（27）

＊

ところで、ロランが《偉人》（homme(s) illustre(s)）あるいは《英雄》（héros）と呼ぶ人たちとは、いったいどのような人たちなのであろうか？ 彼は、彼の『ペートーヴェンの生涯』序文のなかで、《英雄》を次のように定義している。

《私は思想や力によって勝利した人たちを、英雄とは呼ばない。私が英雄と呼ぶのは、心（cœur）によって偉大であった人たちだけである。》（28）

さらにロランは、『ジャン・クリストフ』の序のなかで、この《心》（cœur）という語が内包する広く深い意味に触れて次のように言う。

《この語の意味をふくらまそう！ 心は、単に感受性の領域にとどまらない。私は心によって、内面の生の広大な王国（le vaste royaume de la vie intérieure）を意味する。》（29）

以上のことから、ロランの《英雄》とは、この《内面の生の広大な王国》において《偉大》である人たちを指していることが、明らかである。

しかるに、《内面の生》とは何なのか？それは、個人的かつ個別的な生の背後に流れる普遍的な生 — つまり《生全体の息吹きであり、実質そのものであるところの、顔もなく、名前もなく、場所もなく、時代もない「存在」の生》(30) — のことである。そしてロランによれば、この時間と空間を超越した普遍的な「存在」こそが、各人ひとりひとりの存在の奥底に現存する「神」である。ここに、《内面の生の広大な王国》とは、《「神」の王国》(le royaume de Dieu)のことにほかならない。

それ故、ロランの《英雄》とは、己れの内なる《「神」の王国》において《偉大》なるもののことである。そしてロランは『ペートーヴェンの生涯』序文のなかで、次のように言う。

《．．． 私たちにとって、成功はたいして重要なことではない。問題は、偉大であることであって、偉大らしく見えることではない。》(31)

《偉大であること》、それは内心の命令 — すなわち、あの普遍的存在としての「神」の声 — に耳を傾け、従い、行動することである。そこにこそ、《偉大》さの証がある。そしてその時、世俗的な成功や栄誉は、彼ら《英雄》たちにとって、もはや本質的な問題ではなくなるであろう。真に本質的な目的はどこにあるのか？．．． ロランが『ジャン・クリストフ』のなかで、主人公クリストフについて書き記した次の言葉が思い出される。

《．．． 成功は彼〔クリストフ〕の目的ではなかった．．．彼の目的は、彼の信仰であった。》(32)

この言葉のもつ深い意味は、一人クリストフを超えて、広く、ロランの《英雄》全体におよんでいる。まさしくロランの《英雄》とは、《自分の信仰》をもつこと、言い換えれば、自らの内に自らの固有の「神」をもつことを目的とするもののことである。自らの《心》(cœur)の奥底に実在する、この内なる「神」への憧憬と渴望。燃えるような、烈しい、真正の信仰。《英雄精神》(héroïsme)は、そこに十全の発露を見る。

実際のところ、この「神」への信仰においてのみ、ロランの《英雄》たちは《偉大》でありうるのである。そして首尾よくその信仰に到達するものは、自らその《「神」の王国》の主人となり、その王国の《もろもろの要素的な力の上に身を支

える》(33)ことによって生きつづけるであろう。それ故、ロランは、彼の『回想記』のなかで次のように述べている。

«...目的は栄光ではない。目的は生 — 肉体の生ではなく — 永遠の生である。生きながら、自らを「神」とすること。» (34)

*

ところで、ロマン・ロランは、先にもあげた三つの作品 — 『ベートーヴェンの生涯』、『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』 — のなかで、その生涯にわたって《自らの信仰》を求めつづけた三人の《偉人》または《英雄》の、文字通り《英雄精神》に満ちた姿を描き出している。

しかし彼らの生涯は、けっして安易なものではない。事実、彼らは幾多の試練 — 病気、貧困、悲惨、孤独、精神と肉体の苦痛 — に身を引き裂かれる。彼らは、自らの存在の悲劇に悩み苦しんでいる。なんという痛ましい宿命か！ だがシュテファン・ツヴァイクも言っているように、《偉大な人びとの人生に悲劇的な形態をあたえるということは、まさに運命の好むところである。運命はもっとも強いものにその最大の力を試み、彼らの計画にたいして不条理な偶発事件を起こし、彼らの運命に不可解な諷諭をあたえ、彼らの道をはばむ。それは彼らが強くあらねばならぬところで彼らを強くするためである。》(35)

またロラン自身、先にも引用した1928年8月22日付のD.K.ロイ宛の手紙の中で、次のように述べている。

«私は、真の芸術家の生涯を、利己的な楽しみの一生だとは、けっして考えることができません。私は、ヨーロッパにおいて、もっとも偉大な芸術家たち（ミケランジェロ、レンブラント、ベートーヴェン等々）が、「苦悩の人」（Hommes de Douleur）であらねばならなかったということを、あまりにもよく知っています（...）。それは、ほとんど、真の天才の必要条件であり、彼天才は、不可避免的に、悲惨、孤独、懷疑、一般の無理解という試練を経ねばならないのです。» (36)

もし彼ら偉大な人びとが、その人生の《悲劇的な形態》から逃れようとするなら、そしてもし彼ら偉大な芸術家が、自ら《苦悩の人》であることを放棄しようとする

なら、彼らは永久に《自らを救う》ことはできないだろう。

では、彼らを「救うもの」(Sauveur)、それは、いったいどこにいますのか？
— 彼らは知っている、その「彼」は、ほかでもなく彼ら自身の内にいますことを。
彼らは感じている、その「彼」は、彼ら自身が意志することを待ち焦がれていたま
うことを。それ故、彼らの一人、ベートーヴェンは次のように叫ぶのである。

《おお人間よ、自分自身で自らを救いたまえ！》(37)

《自分自身で自らを救うこと》、それは、自らを実現すること、もっとよく言え
ば、自らの内に存在するあの広大な「王国」において、自らの「神」を実現することである。

そして彼らが自らを実現するのは、まさに《芸術》によってである、— ベー
トーヴェンは「音楽」によって、ミケランジェロは「彫刻」と「絵画」とによって、
トルストイは「文学」によって。そこに自己実現の手段としての芸術がある。

実際、彼らは彼ら自身の芸術を実現することによって、つまり、自らの芸術を
「至高の完全性」に導くことによって、《彼ら固有の信仰》を打ち建てようとする。
その時、彼らの芸術作品の一つ一つが彼らにとっての信仰箇条であり、彼らの作品
の全体が、彼らの《英雄精神》にみちた生涯における信仰告白なのである。それ故、
芸術は「神」へ到る一つの道である。ロランが、彼らの一人であるベートーヴェン
に託して述べた次の反語的な問いかけは、彼らの各々について当てはまるであろう。

《．．．芸術は、彼にとって、「神」に近づく至高の媒介であり、人類に彼の
言葉を伝える彼の使者ではないのか？ — そして「神」自身が．．．芸術家
たちのなかの芸術家ではないのか？》(38)

＊

以上見てきたことから、私たちは、＜ロマン・ロランの伝記作品研究＞連作の筆
頭に、『ベートーヴェンの生涯』、『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』
の三つの作品を置いて、それぞれ分析するつもりである。そしてそれらの各論文に
おいて、私たちは、まず、〔Ⅰ〕— ロランとロランの《英雄》との出会い、魂の交
感を、次に〔Ⅱ〕— 主人公たる《英雄》の《英雄精神》に満ちた生き方、および彼
《英雄》の固有の「神」、固有の「信仰」を、明らかにする。

さらに、これら三つの作品を分析した後、＜ロマン・ロランの伝記作品研究＞の

最初のまとめとして短い論究を試みるが、それは一連の《英雄の生涯（伝記）》のなかでも、特に《偉人の生涯（伝記）》と呼ばれる三つの伝記の統一の見解となるはずである。またその論究において、ロランの「神」と《「神」の王国》についても言及するつもりである。

〔註〕

- (1) Romain Rolland, *Mémoires*, p.309.
- (2) ロランは、1902年2月21日付のルイ・ジレー (Louis Gillet) 宛の手紙の中で、次のように彼の内面を打ち明けている：《．．．問題は、私が愛していたし、いまもなお愛しているものと私が別れるということなのです。なぜなら私たち二人の生活のうち、どちらの生活も他の生活の犠牲にされることを欲してはいないし、二人の生活は、ともども対立した目的をめざしているのですから．．．私は離婚します。— 私がもっとも強く結びつけられていた魂をうまく救えなかったということは、私の力と私の愛情のなんと悲しい結果なのでしょう。》(*Cahiers Romain Rolland 2, Correspondance entre Louis Gillet et Romain Rolland*, pp.130-1.)

またロランは、1901年2月26日付のマルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク (Malwida von Meysenbug) 宛の手紙の中でも、内密に彼の気持を告白している：《．．．私は離婚します。— クロチルド (Clotilde) と私のあいだには、何も変わったことは起きませんでした。— 私たち二人の生活があまりに違いすぎており、私のあらゆる努力にもかかわらず、そしてまた彼女の方での努力にもかかわらず、二人の生活が、おたがいに、宿命的に離反し、遠ざかっていくということ以外には、何も起きませんでした．．．それ故、もし彼女が自由になることを欲するなら、そうあってほしいものです．．．しかしもっとも緊密な絆で結ばれていた魂を、私が範をたれることによって、かつまた私の思想によって救うことさえうまくいかなかったということを見ると、大きな悲しみです。》(*Cahiers Romain Rolland 1, Choix de Lettres à Malwida von Meysenbug*, pp.295-6.)

- (3) R.R., *Mémoires*, p.308.
- (4) Ibid., p.308.
- (5) Ibid., p.309.

- (6) Ibid., p.309.
- (7) ロランは、彼の『回想記』の中で、次のように述べている：「40年のうちに、この燃えたつノートを読みかえす時、（．．．）それ以来、私が不断の労働によってうちたててきた仕事のすべてが、あの1900年に私の精神が呼びおこした、累々たる拱門と神殿の『フォラム（大広場）』のほんの一部分にすぎなかったことが、私にはわかる。」（*Mémoires*, p.311.）
- (8) R.R., *Mémoires*, p.310.
- (9) R.R., *Cahiers Romain Rolland I, Choix de Letters à Malwida von Meysenbug*, p.318.

Cf. 後年、ロランの「英雄の生涯（伝記）」について、オーギュスト・コント (Auguste Comte) やニーチェ (Nietzsche) やカーライル (Carlyle) からの影響を問われた時、ロランはその事実をきっぱり否定している。1936年6月29日付の、ロナルド・A・ウィルソン (Ronald A. Wilson) にあてた返書の一部に、次のようなロラン自身の答えを見ることができる：「．．． — オーギュスト・コントとニーチェとカーライルは、私の精神になんらの影響もおよぼしはしませんでした。オーギュスト・コントからは、私はいつも非常に遠くのところにいました．．． 私が「笑う獅子たち」の真のニーチェについてのフランスにおける最初のいくつかの論文を読みはじめたのは、1892年頃、私がローマからパリへ戻ってきてからのことです。そして私は、もっと間近に彼を知ろうとは努めませんでした。というのは、私は、その時代の他のフランスの友たちと同様、すでに一つの同じ思潮の中にいたからです。私たちは、ニーチェを必要とはしていませんでした。「超人」は、時代の空気の中を浮遊していました。ニーチェは、時代の空気をつくりませんでした。彼はその外に出ていました。彼は時代の空気から咲きでたもっとも目にたつ花にすぎませんでした。カーライルに関しましては、私は、彼の本『英雄』 (*Des Héros*) を翻訳で読みましたが、それは1900年に少し前のことであり、その時すでに私の『フランス革命劇』の一部は書きあげられ、上演されていました。そこに影響はありませんでしたが、 — しかし共感がありました。なぜなら私は、まさしくそこに、私の心に憑き魅する英雄精神 (l'héroïsme) にたいする同じ渴望を見いだしたからです。」 (*Cahiers Romain Rolland 17, Un Beau Visage à Tous Sens*, p.347.)

なお、Miriam Krampf は、ロランが『フランス革命劇』を書きはじめたの

は、カーライルを読んだあとであるとして、上の手紙におけるロランの記憶ちがい指摘している。Krampfはその証拠として、1894年9月20日付でロランがマルヴィーダ宛にだした手紙（未刊）を引いている：《私〔ロラン〕は、彼〔カーライル〕の『英雄』（Héros）を再読しました。そしてそこから深い楽しみを汲み取りました。．．．彼の思想のすべてが、— それは、まさしく私の魂の血液であり、私の存在の実質であります、— 熱烈な調子で、私の心に浮かんできました。たしかに、カーライルもまた、一人の英雄です。》（*La Conception de la Vie Héroïque dans L'Œuvre de Romain Rolland*, p.40.）

- (10) ロランは、1889年8月（23才）にエコル・ノルマルを卒業し、歴史科教授の資格を得る。1895年（29才）に文学博士となり、同11月に、エコル・ノルマルの芸術史の講義（美術史と音楽史）を担当する。1902年5月（36才）からは、パリ大学附属の社会教育高等学院でも音楽史の講義を担当（1911年までつづく）。また1904年11月からソルボンヌで芸術史を講義（エコル・ノルマルの芸術史がパリ大学へ移ったためである）、美術史から音楽史の方へ講義内容を次第に移して行く。1912年7月（46才）に、パリ大学を辞任する。『ベートーヴェンの生涯』序文（1927年3月）のなかで、ロランは次のように書いている：《．．．私は歴史家である。しかしそれは私が歴史家たるべき時においてである。私はいくつかの著作において、— すなわち、私の『ヘンデル』やオペラに関する諸研究において、音楽学にたいして厳正な義務を果たした。》（R.R., *Vie de Beethoven*, p.9.）
- (11) R.R., *Vie de Michel-Ange*, p.8.
- (12) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.15.
- (13) 《真実》と《愛》は、ロランがその全生涯において調和させようと努めた二大法則であった。詳しくは、拙論＜ロマン・ロランの伝記作品研究＞〔一〕にあたる『ベートーヴェンの生涯』論（上）の〔註〕（1）を参照のこと。（京都大学フランス語学フランス文学研究室発行、「仏文研究Ⅳ、1977」所収）
- (14) Cf. Le Robert : “Sympathie. n.f. (1420 ; empr. lat. *sympathia*, « fait d'éprouver les mêmes sentiments », du gr. *sympathia*, proprement. « participation à la souffrance d'autrui ».)”
- (15) R.R., *Le Voyage Intérieur*, p.235.
- (16) R.R., *Robespierre*, p.311.

なお、ロランの歴史認識については、山口三夫氏の『歴史のなかのロマン・ロラン』（頸草書房、pp.80-90）に、みごとな分析がある。そこで氏は、ロランの「伝記」にもふれて次のように言っている：《．．．ぼくたちは、かれがベートーヴェンの生涯、ミケランジェロやトルストイ、またミレーやガンジーの生涯をよみがえらせようとしたときも、かれがまず魂たちをふかく洞察できる歴史家であったことを考えねばならない。史劇を創造しているときとおなじく厳格に、既知の事実や資料の上に身をかがめて、かれはじつくりと歴史的に対話することからはじめる。これはまた対象たる人間との一対一の対話でもある。そして想像的な要素をしりぞけることはもちろん、現実的な、歴史的な諸事象をも人間的ふるいにかけて、かれの「英雄」を生きかえらせるのである。》（同書、p.89）

(17) Charles Péguy, *Œuvres en Prose, 1909-1914, Notre Jeunesse*, pp.578-9.

(18) ロランは、彼の『ベートーヴェンの生涯』の序の中で、次のように述べている：《空気は私たちのまわりに重い。古いヨーロッパは、重苦しく腐敗した雰囲気の中で麻痺している。偉大さのない物質主義が思想の上ののしかかり、各国の政府や諸個人の行動を束縛している。世界は、その用心深くてさもしい利己主義のなかで、窒息して死にかかっている。 —もう一度窓を開けよう！自由な空気を入れよう！英雄たちの息吹きを吸おう。》（R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.13.）

Cf. 上に引いた《空気は私たちのまわりに重い》という、当時のフランスのあらゆる危機的状況については、新村猛著『ロマン・ロラン』（岩波新書、特に pp.46-54）に、簡にして要をえた説明がある。

(19) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.14.

(20) R.R., *Vie de Michel-Ange*, p.9.

(21) R.R., *Cahiers Romain Rolland 17, Un Beau Visage à Tous Sens*, pp.347-8.

(22) Ibid., p.279.

(23) Ibid., p.349.

(24) ロランは、1907年9月19日付のルイ・ジレー (Louis Gillet) 宛の手紙のなかで次のように書いている：《 — アシェット社が、『ベートーヴェン』と『ミケランジェロ』と、それに続くいくつかの『生涯（伝記）』ものの著作権を買いとったところです。》（R.R., *Cahiers Romain Rolland 2*,

- (25) これら以外に、『ミレー』(1902年、ロンドンから英訳で出版された)、『ヘデル』(1910年)などもある。

Cf. ロランは、その生涯じゅう、「伝記」を書きつづける意図をもっていたが、彼の《心と思想の進展にともなういくつかの理由のために》、当初たてられていた「伝記」の計画には、いくらか変更を余儀なくされたようである。1936年6月29日付の、ロナルド・A・ウィルソン宛の手紙のなかで、ロランは、次のように書いている：《 — 私が伝記物語から自分を解き放ち、『ジャン・クリストフ』の創造の中に入るため、いくつかの伝記を放棄したとツヴァイクが言うとき、彼は思い違いをしているのです。『ベートーヴェンの生涯』は幼児のクリストフと同時に産声をあげました。『ミケランジェロの生涯』と『ヘンデル』は成熟の年齢にあったクリストフに連れだって生まれました。『トルストイの生涯』は、クリストフの最期の頃にやって来ました。そして私は、数々の英雄の生涯(伝記)を断念したことは、かつて一度もありませんでした。『ガンジー』の生涯と『ヴィヴェカナンダ』の生涯は、英雄の伝記に属してはいないでしょうか？ ただ私は、当初にたてた計画を放棄しました。というのは、私は自分が、あるいくつかの生涯(Mazzini, Hoche など)から遠ざかっていると感じたからです、それは、いまここで開陳するにはあまりに長くなり過ぎる、心と思想との進展にともなういくつかの理由のためなのです。》(R.R., *Cahiers Romain Rolland* 17, *Un Beau Visage à Tous Sens*, pp.348-9.)

- (26) Jacques Robichez, *Romain Rolland*, p.194.

- (27) 註(9)にあたる本文の引用箇所(1902年10月3日付、ロランのマルヴィーダ宛の手紙)からも気がつくように、ロランは、彼が構想している一連の伝記をさして、「偉人の生涯(伝記)」(*Vies des hommes illustres*)、あるいは「英雄の生涯(伝記)」(*Vies des héros*)という二種の表現をとっている。しかし筆者の私見を述べるなら、ロランの伝記作品全体について言うときには、「英雄の生涯(伝記)」という表現をとる方が適切と思われる。それについての詳しい検証は今はおくとしても、たとえば、『ベートーヴェンの生涯』にロラン自身が寄せた序(1908年の序)においても、《英雄》(*héros*)という語が、重要な意味を内包して使用されているし(cf. *Romain Rolland, Vie de Beethoven*, pp.13-18.)、その後も、ロランは彼の伝記の対象たる

主要人物をさして言う際に、《偉人》(homme(s) illustre(s)) という言い方よりも、《英雄》(héros) という言い方のほうを、好んで用いているように思われるからである。そして、「偉人の生涯(伝記)」と言うときには、それは、「英雄の生涯(伝記)」なる諸作品のうちの、特に次の三つの作品、—『ベートーヴェンの生涯』、『ミケランジェロの生涯』、『トルストイの生涯』をさしていると思われる。

またロランは、そのロラン的な意味での《英雄》(héros) という語を、まったく同義で、《偉大な人間》(grand(s) homme(s))、あるいは《偉大な魂》(grande(s) âme(s)) と言い換えている場合があることに留意しておかねばならない。たとえば、『ベートーヴェンの生涯』序(1908年)のなかに、次のような表現を見ることができる。

《私〔ロラン〕が、彼らの周囲に英雄的な「友たち」を、つまり善のために苦しんだ偉大な魂たち(les grandes âmes)を集めようと企てたのは、彼らを救うためである。》(R.R., *Vie de Beethoven*, *Préface*, p.14.)

また、同書の別なところでは、

《...私が英雄と呼ぶのは、心によって偉大であった人びとだけである。...性格が偉大でないところに、偉大な人間(grand homme)はいない...》(Ibid., p.15.)

このことから、《偉大な》(grand(e)) という語のもつ、ロラン的な真の意味が解明されるとき、《英雄》(héros) という語も、おのずと、そのロラン的な意味を明らかにするであろう。そのことについては、本<ロマン・ロランの伝記作品研究>序説の以下の分析を見られたい。

- (28) R.R., *Vie de Beethoven*, *Préface*, p.15.
- (29) R.R., *Jean-Christophe*, *Introduction*, p.xv.
- (30) R.R., *Le Voyage Intérieur*, p.27.
- (31) R.R., *Vie de Beethoven*, *Préface*, p.16.
- (32) R.R., *Jean-Christophe*, *La Révolte*, p.428.
- (33) R.R., *Jean-Christophe*, *Introduction*, p.xv.
- (34) R.R., *Mémoires*, p.258.
- (35) Stefan Zweig, *Romain Rolland*, p.11.
- (36) R.R., *Cahiers Romain Rolland 17, Un Beau Visage à Tous Sens*, p.278.

(37) R.R., *Vie de Beethoven, Préface*, p.18.

(38) R.R., *Beethoven, La Cathédrale interrompue, les derniers quatuors*, p.1200.

(付 記)

本論文中の引用に関しては、原則として筆者拙訳によったが、訳語の選定などにおいて、下記邦訳を適宜参照させていただいた。

ロマン・ロラン全集〔全 35 巻、別巻 1 巻〕（みすず書房）。

『ベートーヴェンの生涯』（新潮文庫、新庄嘉章訳）、（岩波文庫、片山敏彦訳）

『ミケランジェロの生涯』（角川文庫、倉田清訳）、（岩波文庫、高田博厚訳）

なお、本論文中使用された記号については以下の通りである。

《 》は引用箇所。（ . . . ）は省略。語の上に付された（ . . . ）は筆者による強調。〔 〕は筆者による補足。「 」で囲まれた語は、フランス語で表現した場合、大文字を使用すべきもの（ex. 「神」：Dieu）。

参 考 文 献

参考にした文献は多数にわたるため、本論文中に引用したものにかぎって明示する。

I. — ロマン・ロランの作品

Vie de Beethoven, Hachette, Paris, 1950.

Mémoires, Albin Michel, Paris, 1956.

Le Voyage Intérieur, Albin Michel, Paris, 1959.

Beethoven, Albin Michel, Paris, 1966.

Robespierre, Albin Michel, Paris, 1939.

Cahiers Romain Rolland 1, Albin Michel, Paris, 1948.

Cahiers Romain Rolland 2, Albin Michel, Paris, 1949.

Cahiers Romain Rolland 17, Albin Michel, Paris, 1967.

II. — ロマン・ロラン論

Jacques Robichez : *Romain Rolland*, Hatier, Paris, 1969.

Miriam Krampf : *La Conception de la Vie Héroïque dans l'Œuvre de Romain Rolland*, Le Cercle du Livre, Paris, 1956.

Stefan Zweig : *Romain Rolland, sa vie et son œuvre*, Les Editions pittoresques, Paris, 1929.

山口三夫, 『歴史のなかのロマン・ロラン』 (勁草書房, 1964年)

新村 猛, 『ロマン・ロラン』 (岩波新書, 1958年)

Ⅲ. — その他の作品と著者

Charles Péguy : *Œuvres en Prose 1909–1914*, Pléiade, Paris, 1968.